総合博物館
青森県立郷土館だより
News from the Aomori Prefectural Museum

通巻143号　平成20年（2008）4月1日　Vol.39 No.1

今 純三（こん・じゅんぞう）年譜

明治42年（1909）太平洋画家会研究所に入所。同45年本郷絵画研究所に入所。文展入選。白馬会に出品。大正８年(1919)帝展入選。同12年（1923）関東大震災で被災し、帰郷。青森市で個展開催。石版画、エッチングの研究に着手。同13年弘前市で個展開催。昭和２年(1927)青森県師範学校図画科教授嘱託となる。同６年東奥美術展覧会の審査員(～1943年)。同８年青森県師範学校を退職。東奥日報社編集局嘱託となる。昭和10年（1935）「青森県画譜」の制作に着手。同14年「今純三個人展」を開催（青森市）。上京。同18年『版画の新技法』を東京三国書房より出版。

【制作】昭和元年（1926）
【寸法】8号（縦44.5×横33.3㎝）
【技法】キャンバス・油彩

芸術は年月を超えて～「信子像」発見

この作品は、青森県の油彩画や版画の分野で先駆的役割を果たした画家・今 純三（明治26年～昭和19年、弘前市出身）が描いたもので、平成19年12月、純三の次女小倉ミキさんから、当館へ寄贈されました。この作品の存在は、今まで全く知られていませんでした。純三の作品集や作品目録等への掲載はもちろん、展覧会等にも出品されたことがなく、まさに幻の一点と言えます。

純三の画歴をみると、前半の東京時代は油彩画家としての制作が中心であり、大正12年（1923）に青森へ移住してからは、銅版画の制作が中心となります。これにともない、純三の作風も、印象派風の情感あふれる描き方から、どこまでも正確さと緻密さを追求する写実の方向へと変化していきました。この作品はちょうどこの中間に位置しています。どちらの特徴も兼ねそろえた秀作で、幼子の愛くるしさが見事に表現されています。

描かれている少女は、純三の後援者である船水公明氏の姪・信子さん（現鰺ヶ沢町「高沢寺」松宮信子さん）です。「信子像」は制作されてから80年以上が経過し、画面に汚れや痛みが見られますので、修復することになりました。「2008あおもり新発見展」に間に合わないのは残念ですが、修復作業が終了した時には、純三が描いた当時のままの「信子像」を公開できることになります。どうぞご期待下さい。

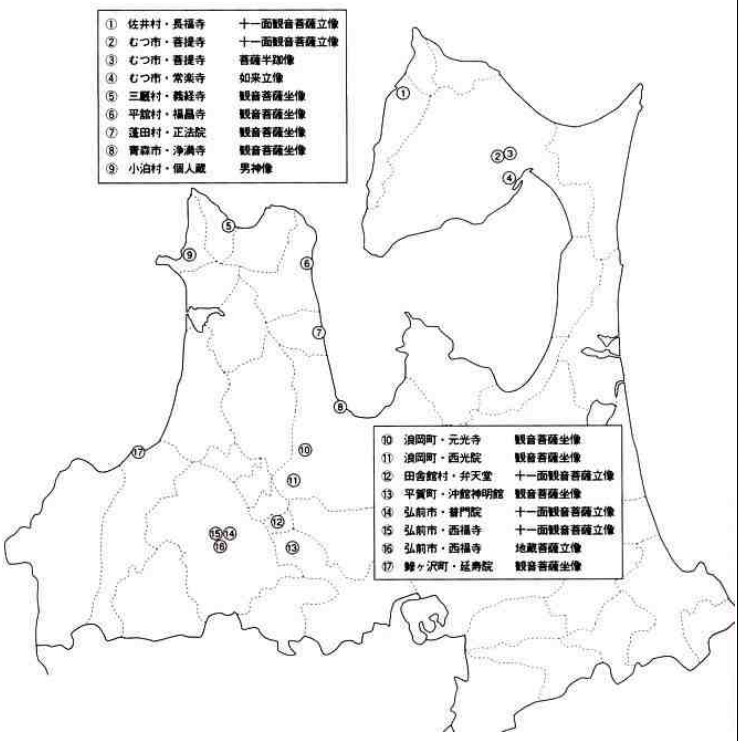
（對馬恵美子）

土曜セミナー

（平成19年12月8日／当館小ホール）

青森県の円空仏

主任研究主査　本田伸



伴蒿蹊（ばんこうけい）「近世畸人伝」巻2の挿絵に、飛騨国袈裟山千光寺で立木に仁王像を刻む円空（えんくう）の姿がある。さらに、円空が未開の人々を教化し「この世の釈迦」と称えられたと記されている。正編は寛政2年（1790）、続編は同10年の成立で、著者が円空の生の姿を見たはずはないが、場の雰囲気はよく伝えている。

江戸前期の造仏僧・円空は、30歳を過ぎて十万体造仏を発願し、故郷の美濃国を去った。その旅の初めが東北・北海道だったことは、案外知られていない。寛文3年（1663）に岐阜県美並村・神明社の小像群を制作した後、日本海沿岸を北上して秋田～津軽～松前へと抜けた。「弘前藩庁日記」（御国日記）寛文6年正月29日の記事に「一、円空と申旅僧壱人長町ニ罷有候処ニ御国ニ指置申間敷由被仰出候ニ付而、其段申渡候所、今廿六日ニ罷出、青森へ罷越、松前へ参由」とあり、弘前を追放され、青森を経て、松前へ向かったことが分かっている。その理由は定かでないが、みすぼらしい姿でナタをふるう姿が奇異に映ったのかも知れない。

円空は松前から釧路へ、さらに礼文島まで足を延ばし、1年余を経て再び津軽に現れる。義経寺（ぎけいじ、三厩村）の観音菩薩坐像の背面には、朝游岳楽子という人物が寛文7年夏に認めた墨書銘があり、像の制作時期はその少し前と考えられる。津軽の観音菩薩坐像としてはほかに福昌寺（外ヶ浜町平舘）、正法院（蓬田村）、浄満寺（青森市）、元光寺（青森市浪岡）、西光院（同）、沖館神明宮（平川市平賀）、延寿院（鰺ヶ沢町）の計8体が知られているが、いずれも肘と胴体の間に鋭角的なへこみを持たせる表現がとられ、一連の作であるのは間違いない。津軽半島の東海岸を南下した後は、羽州街道に沿って秋田領に去って行ったのであろう。

円空の足どりについては、まだ不明の点がある。例えば、下北半島には4点の円空仏があるが、制作時期が渡道前か後かは、いまだに確定できない。長福寺（佐井村）と菩提寺（むつ市恐山）の十一面観音菩薩立像は、渡道前の作と思われる弁天堂（田舎館村）や普門院（弘前市）の十一面観音菩薩立像と比べ技法的に進歩しているが、渡道後の作とは断定できない。菩提寺の菩薩半跏像や、本県内で制作された円空仏17体の中で最優品とされる常楽寺（むつ市大湊）の如来立像も、同様である。円空が寄宿して観音像1体を授けたと記す「万人堂縁起」（むつ市・熊谷家文書）などを含めた再検討が待たれる。

ものは語る　アオモリムカシクジラウオ～新種の深海魚化石

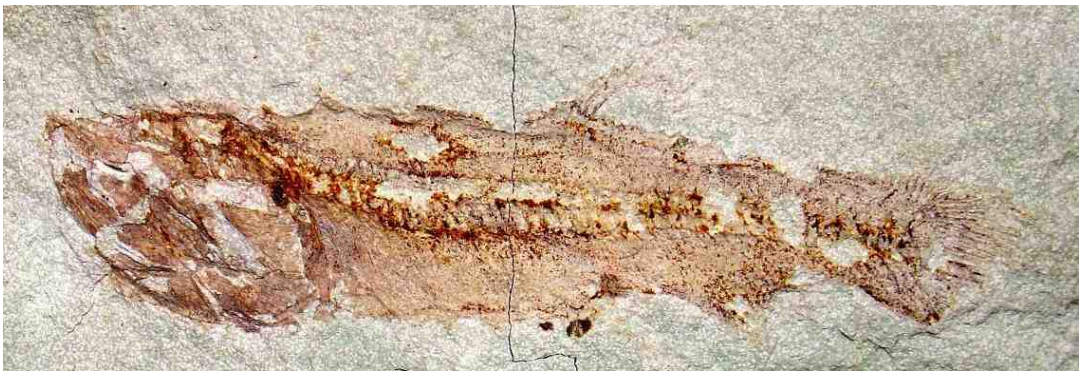
昭和45年（1970）10月、青森市の荒川上流で行われた砂防ダム建設に伴う林道拡幅工事の際に、工事を行なった建設会社の社員によって魚類化石が発見され、化石はその2年後に当館に寄贈されました。

保管された化石の研究は、国立科学博物館の名誉研究員上野輝彌（うえのてるや）氏に同定を依頼した平成12年（2000）にスタートし、上野氏はルーテル学院大学教授の藤井英一（ふじいえいいち）氏と研究を進めました。

その結果、深海魚アカクジラウオダマシ科のアカクジラウオダマシとの間にいくつかの共通の特徴があることから、同科に属することが判明しました。さらに、アカクジラウオダマシと異なる特徴もあることから新属「ムカシクジラウオ属」を提唱し、新種「アオモリムカシクジラウオ」（学名：Miobarbourisia aomori）と命名しました。

アカクジラウオダマシは、ぶよぶよして軟らかい真赤な体をした珍しい深海魚です。一般にこのような柔らかな体の魚類は化石になりにくく、アオモリムカシクジラウオが同じような体をもっていた可能性は高いため、かなり詳細な部位まで観察可能なほどよい状態で保存されていたことは奇跡的でさえあります。アオモリムカシクジラウオは、アカクジラウオダマシの仲間の世界初の化石であり、多くの原始的特徴をもつことから、この仲間の進化の跡をたどる上で重要です。また、化石が発見されたのは1500万年前の地層であり、当時の青森県域は深海の環境であったことがわかります。

（島口　天）



アオモリムカシクジラウオ 体長74㎜ (収蔵番号AOPM 491 タイプ標本)

郷土の先人㉑　青森の近代化に努めた　菊池　九郎（きくち　くろう）

1847(弘化4)～1926(大正15)　弘前市出身

弘前藩士の長男として生まれた菊池九郎は、藩校稽古館（けいこかん）に学びました。学友には青山学院長にもなった本多庸一（1848～1912）がいます。幕末の動乱から明治維新という大変革期に、菊池らは青春時代をおくりました。明治2年（1869）、菊池は慶應義塾に入学して英学を学び、翌年、当時の先進藩の一つであった鹿児島に行きました。そこで新しい学問や思想を知り、教育の重要性を痛感します。

帰郷後、菊池は新しい教育のあり方に基づく私立学校を設立しようと、明治5年、東奥義塾を創立します。ここにジョン・イング（1840～1920、アメリカ出身）ら外国人教師を迎え、英語による授業を中心に、本場の西洋文化を学ばせました。その教育水準は非常に高く、県内各地から多くの俊才が集まり、のちの日本の外交を担う人材も育っていきました。

菊池は政治家としても活躍しました。明治22年、初代弘前市長に選ばれ、翌年には第一回衆議院議員選挙に当選し、連続で9期も務めました。

その後、いったんは政界を引退しますが、人望厚い菊池の再登場を願う声は強く、明治44年、請われて再び弘前市長に就任し、市政の建て直しに尽力しました。

他にも養蚕・養桑・りんご園事業など各方面で指導的役割を果たしました。明治21年には、東奥日報を創刊しています（写真は当館蔵）。

（太田原慶子）

平成20年度行事予定（平成20年4月～21年3月）

○特別展・企画展

3月20日(木)～ 4月20日(日)「2008 あおもり新発見」
4月26日(土)～ 5月 6日(火)「国絵図特別公開」
5月16日(金)～ 7月 6日(日)「青函連絡船なつかしの百年～海峡を渡る船と人」
7月25日(金)～ 9月28日(日)「団塊世代の青春時代～よみがえる昭和40年代」
10月11日(土)～11月16日(日)「ジュディ・オング 倩玉 木版画の世界」
11月22日(土)～ 1月18日(日)「蓑虫山人と青森～放浪の画家が描いた明治の青森」
3月 3日(火)～ 5月 6日(水)「サムライ・チャンバラ博覧会」

○催し物

ミュージアム探検隊	土・日・祝日に開催
郷土館クイズラリー	夏休み・冬休みに開催
自然観察会	7月27日(日) 9月21日(日)
夏休みこどものくにづぐり回し大会	8月 3日(日) 8月17日(日) 冬休みに開催

○土曜セミナー 原則として毎週

※日程・講師・場所は事前にご確認ください。

○休館日

館内整理	4月21日	5月7日	7月15日
	9月29日	11月17日	1月19日
燻蒸休館	7月10日～7月14日		
年末年始	12月29日～1月 3日		

○工事休館 平成21年2月1日(金)～28日(土)

※レファレンス等には対応します。

2008 展示室リニューアルー風韻堂 春のコレクションー

工事休館中に、わが国有数の縄文遺物コレクションである「風韻堂」(ふういんどう)の展示をリニューアルしました。展示室の壁紙は上品な色合いのベージュに、展示ケースの枠はパステル調の薄い緑色に、展示ケースや台の布はやわらかみのある白になりました。室内は明るく落ち着きのあるものとなり、春の趣（おもむき）を漂わせています。

展示室の中央は、寄贈者である故大高興（おおたかこう）氏を紹介するコーナーになりました。展示品も大きく入れ替え、風韻堂コレクションの中心となる亀ヶ岡式土器に加え、小さいながら細部まで丁寧に作り込まれた小型土器や、表情豊かな土偶も、多数展示しました。青森県内ではまず目にすることのできない奈良県の古墳の土器も展示しています。

新しくなった風韻堂コレクションを、ぜひご見学ください。

〔上〕 注口土器 〔下〕人面土偶

特命チーム、汽笛を追え！

2008年3月7日。青函連絡船が開業してちょうど100年目。現存の3隻が一斉に汽笛を鳴らすという情報をつかんだ撮影チームは、現場へ急行した。

八甲田丸の雄姿を見上げる二人。

A「風情があるぜ。さて汽笛はどれだ?」B「…。」(沈黙)
A「まあいい、取材陣が狙っている方向を撮そう。カメラは2台ある、大丈夫さ」
B「それはいい。お前、民俗調査で慣れたなア!」A「よせよ、オイ」(照れる)
互いにカメラを構える。足元ズブズブ、雪がぬかる。10時まであと2分、1分…。
A「いいアングルだ。汽笛よ、さあ来いっ!!」そのときだ。
B「オイ、カメラが結露だ。動かない…」A「ドンマイ、オレのカメラがある!」
Aのカメラの前をふさいで、口笛の若者が。Aの形相を見て「スミマセン…」。
どうする、撮影チーム…!（つづく?）（O）

この一枚

青森市／平成20年3月撮影

企画展「青函連絡船なつかしの百年～海峡を渡る船と人」はただ今、準備中。お楽しみに。

総合博物館 青森県立郷土館だより Vol.39 No.1 通巻143号 2008.4.1
編集・発行 総合博物館 青森県立郷土館
〒030-0802 青森市本町二丁目8-14 TEL (017)777-1585(代)
ホームページ http：//www.pref.aomori.lg.jp/kyodokan/
電子メール E-KDGAKUGEI@pref.aomori.lg.jp